

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名	木村 隆浩
題 名	<p style="text-align: center;">Prognosis of asymptomatic endolymphatic hydrops in healthy volunteers: A five-year cohort study (和 訳) 健康なボランティアの無症候性内リンパ水腫の予後：5 年のコホート研究</p>
<p>メニエール病 (MD) は、回転性めまい発作、感音性難聴、耳鳴りの症状を繰り返すことが特徴とされる。MD の病態は内リンパ水腫とされており、その検出方法としてグリセロール試験、フロセミド試験などの検査が確立されている。しかし、内リンパ水腫を検出する方法として内耳造影 MRI が確立され可視化と分類が可能となった。MD 確実例はコントロール群と比較して内耳造影 MRI で水腫陽性率が有意に高いことを示した。病理的・画像検査で水腫用例にもかかわらず無症状の症例があることが報告されているが、その病態は未だ不明で予後は不明である。今回、健康なボランティアを対象に、5 年間の追跡調査を内耳造影 MRI を用いて実施し、無症候性内リンパ水腫の予後を明らかにすることを目的とした。</p> <p>対象は過去 MD に関する研究で対照群として採用された 115 名の被験者で内耳造影 MRI で陽性を示した 8 名とした。内耳造影 MRI は、ガドリニウム静注による造影 MRI の長縄法を用いて内リンパ腔を視覚化し、中島法による 2 次元画像解析を用いて評価した。初回 MRI 撮影時と 5 年後の撮影時に自覚症状・聴力検査を行い、5 年後の撮影時にはさらにシェロング試験・自己評価うつ病尺度による評価を行った。</p> <p>7.0% (n=8) の参加者に蝸牛または前庭の内リンパ水腫が認められ、すべての症例が片側性、中等度、無症候性であった。内リンパ水腫が蝸牛のみ、前庭のみ、および両方に認められたのは、それぞれ 1.7% (n=2) (C 群)、4.3% (n=5) (V 群)、0.9% (n=1) (CV 群) であった。5 年後に内耳造影 MRI を実施したところ、C 群 V 群のそれぞれで 2 人の参加者の内リンパ水腫はほぼ消失していた (4/8、50.0%)。V 群の 3 人、C 群の 1 人の参加者において内リンパ水腫は依然として存在していた (4/8、50.0%)。V 群の 1 人、C 群の 1 人の参加者で内リンパ水腫が残存し、典型的な症状を伴う MD を発症していた (2/8、25.0%)。内リンパ水腫が維持された症例においてシェロング試験陽性率が有意に高く、5 年後に MD の症状を発症した参加者において自己評価うつ病尺度の得点が有意に高かった。</p> <p>健康な参加者の約 7% が、無症候性内リンパ水腫を示したことから、内リンパ水腫は MD の診断を確定するマーカーとは言えない。無症候性内リンパ水腫を有する健常者の 75% が、5 年間の追跡調査において、聴覚・前庭症状を示さなかったため、EH は MD 発症の適切な予測因子とはなり得ない。無症候性 EH は、その後、自律神経失調や精神的苦痛などを通じて MD の症状発症につながる可能性がある。</p>	